木造釈迦如来立像（重美）

太用寺の釈迦堂に安置されている釈迦如来像は、高さ一六四・三センチの寄木造りの等身像で、鎌倉時代末期の作とされている。

京都嵯峨の清涼寺・香川の出釈迦寺の本尊と同木・同作といわれ、インドの仏師毘首羯摩の作と伝えられているが、十世紀に中国から伝来した清涼寺釈迦像の模造の一つである。

全身をおおっている三重の衣とその同心円風の衣文、そして縄状の髪がうず巻いている髪型に大きな特色がある。

太用寺はもと大きな寺であったが、天正年中（一五七三～一五九一年）に兵火にあい、さらに明治維新後に村民が神道に改宗し檀家が減ったためすたれてしまい、現在は釈迦堂だけ残っている。

釈迦堂の後ろの墓地には、江戸時代約百八十年もの間、北方地方で広まった藤樹学の指導者たち（矢部惣四郎、五十嵐養安、遠藤謙安、矢部文庵、遠藤松斎、森代松軒、井上友信、矢部湖岸、矢部直麗、等）の墓がある。

所　在　地　岩月町大都字寺前　太用寺

認定年月日　昭和十九年七月六日